



第72回日本皮膚科学会中部支部学術大会
ランチオンセミナー ⑦

患者さんの 治療満足度向上を目指した アトピー性皮膚炎治療

2021年 11月 21日 日
12:00 - 13:00

B会場 | 奈良県コンベンションセンター
1F コンベンションホールB

〒630-8013 奈良県奈良市三条大路1-691-1

ハイブリッド開催

講演

1

アトピー性皮膚炎における 治療目標の設定の重要性と患者指導のコツ

座長 天谷 雅行 先生 慶應義塾大学医学部皮膚科 教授

演者 矢上 晶子 先生 藤田医科大学ばんだね病院 総合アレルギー科 教授

講演

2

アトピー性皮膚炎治療 ～今一度かゆみに着目する～

座長 島田 眞路 先生 山梨大学 学長

演者 谷崎 英昭 先生 関西医科大学附属病院 皮膚科 教授

第72回日本皮膚科学会中部支部学術大会は現地とLive配信どちらからでもご聴講いただけるハイブリッド開催となりました。COVID-19流行状況により変更になる可能性がありますので、最新情報を下記WEBサイトよりご確認ください。

第72回日本皮膚科学会
中部支部学術大会WEBサイト <https://cjda72.jp>



本セミナー・ご講演に関するお願い

本セミナー・講演中の録音、録画、カメラ撮影、スクリーンショットはご遠慮ください。また、不正に撮影された写真等をインターネット（Twitter等）にアップロードすることも禁止させていただきます。ご理解、ご協力の程、よろしくご願ひ申し上げます。



講演

1

アトピー性皮膚炎における 治療目標設定の重要性と患者指導のコツ

演者 矢上 晶子 先生 藤田医科大学ばんだね病院 総合アレルギー科 教授



アトピー性皮膚炎患者は乳幼児から中高年に至るまで年齢層が広く、患者ごとに重症度もさまざまである。皮膚科医は小児も含めあらゆる年齢層のアトピー性皮膚炎患者を診療するが、治療の基本は、やはり「外用治療」、「スキンケア指導」、「悪化因子の探索」と言えよう。多くの場合、皮疹の良好なコントロールを目標に、患者ごと、その時々の皮疹の状態ごとに外用薬や保湿剤を選択し治療を進めていく。外用治療においては、近年、その選択肢が広がっており、特にコムクロ®シャンプーは湿疹・皮膚炎群の適応が追加され、頭皮の湿疹が続くアトピー性皮膚炎患者ではその有用性が明らかになりつつある。

アトピー性皮膚炎の診療における患者満足度の向上には、まず重症度を判断し、短期的、そして長期的な治療目標を提示することで患者のアドヒアランスの向上が期待でき、同時に適切な患者指導を行うことによって、それまで長期的に遷延化してきた湿疹が段階的に改善することが可能となるのではないかと考える。本講演では、アトピー性皮膚炎の診療における具体的な治療目標の設定と外用療法を含めた患者指導について述べたい。

ご略歴

1996年 3月	藤田保健衛生大学医学部卒業	2011年 4月	藤田保健衛生大学医学部皮膚科学 准教授
2002年 3月	藤田保健衛生大学医学部大学院 医学研究科 博士課程卒業	2016年 4月	藤田保健衛生大学医学部皮膚科学講座 臨床教授
2004年 4月	藤田保健衛生大学医学部皮膚科学 講師	2017年 1月	藤田保健衛生大学 医学部総合アレルギー科 教授
2007年 7月	国立成育医療センター研究所免疫アレルギー研究部へ 国内留学(斎藤博久部長)	2017年 7月	藤田保健衛生大学総合アレルギーセンター 副センター長
		2018年10月	(校名・病院名変更)藤田医科大学 ばんだね病院
		2021年 4月	藤田医科大学総合アレルギーセンター センター長

講演

2

アトピー性皮膚炎治療 ～今一度かゆみに着目する～

演者 谷崎 英昭 先生 関西医科大学附属病院 皮膚科 教授



アトピー性皮膚炎(AD)は、増悪と軽快を繰り返すかゆみを伴う湿疹性病変を特徴とする慢性の炎症性皮膚疾患である。ADの病態を表す3要素として、皮膚のバリア障害・アレルギーの異常・かゆみの異常が挙げられるが、背景にはTh2をメインとした免疫学的機序が考えられている。このなかで自覚症状として重要なのがかゆみである。ADの重度のかゆみは労働生産性やQOLの低下を引き起こすため、かゆみのコントロールは重要である。近年ADのかゆみを惹起する起痒物質としてIL-4、IL-13、IL-31などが同定され、治療標的として注目されている。

近年になりそれらサイトカインを標的とした生物学的製剤や、外用剤や内服薬の適応追加等があり、治療薬の選択肢の幅が増えてきている。選択肢が増えたことは喜ばしいことではあるが、一方でそれぞれの薬剤の使い方や、使い分けについて悩まれる先生方もいるのではないかと。本セミナーでは、アトピー性皮膚炎の治療薬の使い方について見直したい。

ご略歴

2002年 3月	島根医科大学(現島根大学)医学部医学科卒業
2002年 5月	京都大学医学部附属病院 皮膚科 研修医
2005年 4月	京都大学医学部附属病院 皮膚科 医員
2006年 4月	京都大学大学院医学研究科 皮膚科学
2010年 4月	京都大学医学部附属病院 皮膚科 助教(病棟副医長・医局長) (2013年9月～10月 Department of Dermatology, University of Colorado Denverに留学)
2015年 4月	大阪医科大学附属病院 皮膚科 講師(外来医長・医局長)
2020年 4月	関西医科大学附属病院 皮膚科 教授 現在に至る